

OG訪問

庄木さんは、大学院修士課程修了後、臨床心理士の資格を取得、精神腫瘍科に所属し、がん患者の心のケアを担っています。さらに大学院博士課程にも在籍。臨床と研究両面から、まだ新しい学問、精神腫瘍学(サイコオンコロジー※)に果敢にアプローチしています。

※精神腫瘍学/サイコオンコロジーは心理学(サイコロジー)と腫瘍学(オンコロジー)を組み合わせた造語。

国立がん研究センター 中央病院 精神腫瘍科 勤務

庄木 晴美さん

(心理科学部臨床心理学科2006年卒業、
大学院心理科学研究科臨床心理学専攻修士課程2008年修了、
現在博士課程在学中)



■ がん領域専門の心理士

庄木さんが心理療法士として勤務するのは、1992年、全国に先がけて開設された国立がん研究センター中央病院の精神腫瘍科です。精神腫瘍科はがん患者さんの主治医(身体医)から依頼を受け、精神腫瘍医(精神科医)と心理療法士がペアを組み患者さんとそのご家族の心のケアにあたる診療科です。精神腫瘍医は主に薬物療法を、心理療法士はカウンセリングやケースマネジメントを担当し、病状の進行や手術後の体の状態の変化により現れる様々な精神症状に合わせ、苦痛を緩和し、その人らしい生活をサポートします。

精神腫瘍学の歴史が浅いこともあり、庄木さんのようにがん領域専門の心理士の役割は現状では未知数です。庄木さんも「チーム医療の中でケースに積極的に関与して心理士の存在をアピールしつつ、他の医療職の領域を侵さず黒子のように動く、そのバランスを意識します」と、自身のキャリアだけでなく、道を開いていく者の責任を感じています。

■ 死生観に触れて

庄木さんは年間およそ80人のがん患者さんご家族の話を聞いています。「がんという身体疾患が心理療法のハードルをさらに上げる」という現実に、自身が専門とする認知行動療法のエッセンスを取り入れて臨みます。

当初は、患者さんの深い苦悩の前に「志はあって



身体面も精神面も、患者さんの情報は電子カルテ等で細かに共有。もちろんカンファレンスにも参加します。

も人生経験に乏しい自分がどこまでできるか」という不安、死生観に触れ、みつからない正答を求める苦しさも味わいました。しかし、困難の数に比例するように「がん患者さんの伴走者でありたいという気持ちはますます強くなった」と言います。

■ 「同志」、そして「コンパス」

庄木さんが担当した中に、がんの再発時に予後の厳しさを告知された患者さんがいました。健康ならエネルギーあふれる30代。患者さんは死に対する恐怖、絶望に打ちのめされましたが、庄木さんと一緒にそれを越え、毎日をいかに楽しく過ごすかを考えられるようになったそうです。亡くなるまでの半年間、1日1日を大切に生きた患者さんとの関係は「まるで同志のようだった」と言います。話を聞くだけで胸がつぶれるような数々のケース、その度に庄木さんは心理士の存在意義を確認し、使命感を奮い立たせてきたのです。

心理士の仕事は目に見えるかたちで報われることは少ないかもしれませんが、だからこそ「私のコンパスです(道に迷った時、方向を示す存在)」という患者さんのひと言が宝物になります。そして何より、心のケアを必要とする人がいる臨床には心理士を引きつける大きな力があります。「心理士はクライアントと自分、両方の人間の幅を広げる素晴らしい仕事です」。臨床を知らなければ出なかった言葉に、庄木さんの誇りを感じます。

■ 医学会へのチャレンジ

庄木さんは社会人大学院生として博士課程の学位論文「がん患者の心理社会的支援に対する認知・行動に関する研究」に取り組んでいます。就職してからは、業務外での



外来、入院の患者さんに加え、他病院のがん患者さんにも対応します。治療中も終末期も、生活の質を最大限保てるよう専門知識と技術、人間性を総動員します。



修士課程在籍中、坂野研究室で国際学会参加のためにバレロナへ。坂野雄二教授(中央で光っています)は、日本における認知行動療法の第一人者です。

個人的研究にも不可欠となる医師はじめ職場の理解と協力を得るなど体制づくりから始めました。「困難な場面を多々乗り越え、数年がかりでようやく調査ができる段階になりました」。

時間も限られている中、何がそこまで庄木さんを研究に駆り立てるのか、答えは学部3年に入った坂野ゼミにありました。漠然とした好奇心から心理学を学び始めた庄木さんでしたが、先輩の姿に触発されたのです。「ストリクトな研究姿勢、心理の世界の高みをめざす向上心、そして坂野ゼミの看板を背負う誇りにしびれました」。

2012年、庄木さんは国内トップクラスの精神腫瘍医が集う合同班会議で研究計画をプレゼンしました。「手厳しい指摘を受けた」そうですが、目標とする学会発表へ、着実に歩を進めています。

国民の3人に1人ががんで亡くなるというこの国の精神腫瘍学の発展をリードするトップランナーの心理士へ。庄木さんの努力が実を結ぶ未来を期待せずにはいられません。



庄木さんは緩和ケアチームにも所属しています。庄木さんの右は緩和ケアチームの看護師、他の3人は心理療法士です。